

英語“で”学ぶ活動を起点に改革 変化の激しい世界で通用する マインド・スキル・自信を育む

CASE ② 箕面高校 (大阪・府立)

「英語が話せない」裏にある
マインドやスキルの問題

大阪府立箕面高校は、英語の活動で注目されており、一見、語学に力を入れてきたように思える。実際はそうではない。校長だった日野田直彦先生をはじめ皆で目指したことは別にある。

「今の高校生は、大半が将来まだ存在しない仕事に就くと予想されています。2050年の人口やGDPの推計によれば、現時点で上位の中国やインドのほか、ナイジェリアやインドネシアも躍進し、世界情勢も様変わりします。そうした変化の激しい時代のなかで、多様な人と勇気をもってチームを組み、イノベーションを起こし、世界に貢献できる人になってほしい、と思っています」

(日野田先生)

そのために生徒にまず必要なのは「自信」だと首席の池谷陽平先生は思っている。

「本校は偏差值的に地域4番手くらいで、能力はあるのに自信がない生徒が多いんです。外でも一歩踏み出せる勇気をもてるというのが」

その生徒たちに激変する世界でやっていける自信をどうすれば育めるか。

土台となるのは「生徒がオーナーシップをもつこと」だとSET(欄外※1参照)の高木草太先生は考える。勉強も進路選択もやらされるのではなく

自分事を取り組む姿勢。

「家族や先生から促されたことでも最後は『自分で決めた』という自覚をもつて物事に取り組んでほしいのです。そして『自分で決めた』ことに取り組むための能力を培うなかで、自信もつけてほしい。その自覚と自信さえあれば、何でも挑戦できると思うのです」

オーナーシップを生徒がもてるよう、教員にできることは何か。日野田先生が思うのは、第一に「マインドセットを変えること」、次いで「必要なスキルセットを伸ばすこと」という。

「20世紀はFixed Mindset(固定的な思考態度)が評価され、教育でも忠実な人を育てようとしたが、21世紀はGrowth Mindset(しなやかな思考態度)が大事と言われています。失敗

を恐れずやってみようとするマインドや、心を開いて異論も受け止めるオープンマインドを生徒に育んでいきたいです。そのうえで、自分たちの課題を解決するためのスキル、思考したり議論したりするためのスキルも伸ばしていきたいですね」

マインドセットとスキルセットの必要性は、英語教育に関心をもつ先生たちも感じていたことだった。日本人の多くは、なぜ英語を話せないのか。それは語学力というより、マインドとスキルの問題ではないか。要は、英語にとどまらない問題なのだ。進路指導部長の寺下公章先生はこう表現する。

「私は、グローバル人材というのは、自分の意見をちゃんと相手に伝えられる人のことだと思うんですよ」

改革のための工夫 ①

意見が割れて頓挫しないよう 想いを一つにして働ける環境に

箕面高校の改革は校長の日野田先生を中心に進められたといえるが、そのやり方はトップダウンではなかった。多様な先生がいるなかで、意見対立や意欲喪失で改革が頓挫しないよう、日野田先生は次のようなことに努めていたという。

① 各先生のやりたいことを聴く

まず注力したのは、やりたいことや困っていることを先生たちから聴き出すこと。批判を言いにくいた先生にも「先生は何をしたいですか?」と問い返し、想いの把握に努めた。

② 先生たちの想いに沿った提案

着任後の3カ月で日野田先生は「どうすればみんなで意欲的に学校をより良くしていけるか」を何度もシミュレーション。何通りもの試案のなかから、「各先生の想いに沿った改革案」を示して賛同を得ていった。壁一面ホワイトボードの導入では、生徒に民主主義を学んでほしい先生たちの想いにも沿うことを示す、といったぐあいに。

③ 有志の活動から規模拡大

いきなり全員に負担となる提案は原則行わない。校長として、やりたいことのある有志に対してプロジェクト立ち上げなどを支援。その活動や成果に関心をもった先生をさらに巻き込み、改革の波を大きくしていった。

箕面高校の近年の動向

	自治体・学校方針	授業・講座	施設・行事等
2014年度	●大阪府「骨太の英語力養成事業」の指定校に。海外大学に進学できる英語力を目指す	●TOEFL iBT対策となる「土曜特設講座」開設、有志の先生と民間企業の講師が共同運営	●教室に壁一面ホワイトボードや大型ホワイトボード導入
2015年度	●大阪府の特定任期付職員SET(Super English Teacher)が着任	●土曜特設講座をオープンマインドや21世紀型スキルを育む講座にブラッシュアップ	●職員室のフリーアドレス化 ●英語4技能を問うスコア型検定導入 ●短期留学プログラム再構築
2016年度	●「国際教養科」募集停止、理系選択もできる「グローバル科」開設	●学校設定科目としてTOFEL型授業の「骨太英語」「創造英語」開設 ●土曜特設講座で年間のPBL(課題発見・解決型学習)プログラム構築	●スタンフォード大学のd-schoolを参考に図書館改修
2017年度		●グローバル科2年の総合学習を「21世紀型スキル」と題してPBL実践	

土曜特設講座や総合学習で培われた知見を、各教科の授業にも活用

英語や思考スキルを使って生徒が自分事に取り組み

ではマインドやスキルの育成を学校全体で行うにはどうすればいいか。

箕面高校で一つの推進力となったのは大阪府の教育施策だ。2014年度に「骨太の英語力養成事業」の指定校となり、英語力を海外大学に修学できるレベルにまで上げることや、「OPEN B1(欄外※2参照)に対応した授業の

開始を目指すことになった。

箕面高校はこれを、英語を使うためのマインドやスキルから整えることと解釈。そのための第一歩として、民間の英会話スクールと連携し、まずは希望者が参加できる課外授業の形で「土曜特設講座」を立ち上げた。

運営するのは有志の先生。池谷先生をはじめ英語の先生が集まるなか、数学を教える寺下先生も加わった。「英語の先生だけに負荷をかけたくな



短期夏季留学では、社会課題解決に挑む人の講演やワークショップを受けてから、その面前で、生徒がチームで課題に取り組みプレゼンまで行う。参加者のなかには、後に高校生ながら慶応のビジネスコンテストに優勝した生徒も。

かったのと、半分は興味からです。私も過去の体験から英語教育に疑問があり、外ではどう教えているのかなど。例えば3秒以内に何か言うルールがありました。これは数学の授業でも応用できますよね。私がやれば、講座に参加していない生徒もそのエッセンスを味わえるわけです」

2015年度には、SETとして高木先生が着任、「土曜特設講座」を池谷先生たちとさらに磨いていく。高木先生が目指した方向性はより明確だった。英語を学ぶのではなく、生徒たちが自分事になりうるテーマを英語で考えたり話し合ったりする。それによって結果的に、オープンマインドや思考スキル、英語4技能も鍛えられるという流れだ。

導入。高校のPR動画作成など、年間4つのプロジェクトに、生徒はチームで英語を使って取り組んだ。

「生徒が『いろいろなことにチャレンジしよう』とする空気をつくることを重視しています。英語も『しゃべろう』という気持ちがあれば、間違えることすらできませんし、間違えなければ気づきもなく、スタート地点にも立てないので」(高木先生)

その講座の運営に、池谷先生や寺下先生は、国語や数学や社会など他教科の先生も誘うようになる。生徒が英語で取り組むテーマは、さまざまな教科の学びを生かせるものであったほうが面白くなるからだ。

「講座の自身を考える会議は本当に楽しかったです。高木先生の考え方に我々がまず触発されましたし、方向性を理解したうえでチームで考えると、

改革のための工夫 ②

「予算がない」という壁を乗り越える挑戦

①自治体の支援事業の活用

都道府県や指定都市では、学校の判断で執行できる予算(学校裁量予算)を導入している自治体が半数近くある。学校側が「学校経営計画」あるいは独自の取り組みについての「事業計画」を策定。それを教育委員会が評価し、支援校や指定校に選ばれると、予算措置がされる仕組みだ。箕面高校は大阪府の学校経営推進費の事業に応募。支援校となって得た推進費で、壁一面ホワイトボードの導入や図書館の改修を実現させた。

②外部連携でプロトタイプ開発

箕面高校は外部団体との連携も推し進めたが、その際は先方に「これから全国の学校に広めるプロトタイプ(原型)」の共同開発を提案してきた。相手が決めかねていても粘り強く交渉して、学校は前例がないことに挑戦するリスクを背負うが、自分たちの狙いをプログラムに反映しやすくなる。外部団体は「公立高校実施」の信用を得る先行投資とみなせば、費用の大幅割引もできなくはない。そうしてお互いにメリットのある形を見出して予算の問題を乗り越えてきた。

※1 SET(Super English Teacher)…大阪府に特定任期付職員として採用され、配属された先生。TOEFLiBTスコア100点以上またはIELTSスコア7.5点以上の人のなかから選任されている。



SET (取材時)
高木草太先生



進路指導部長
(取材時)
寺下公章先生



首席 (取材時)
池谷陽平先生



校長 (取材時)
日野田直彦先生

海外進学の実績 (2017年度)

下記の大学を含めて、海外大学に36名合格。

メルボルン大学	世界33位	2名
シドニー大学	世界60位	3名
クイーンズランド大学	世界60位	1名
パデュー大学	世界70位	1名
モナシュ大学	世界74位	1名
ニューサウスウェールズ大学	世界78位	2名
ウェズリアン大学	全米9位	1名
グリーンネルカレッジ	全米73位	1名
ミネルバ大学 (日本の一条校初)	—	1名

※世界ランキングは『Times Higher Education2016-17』より

※全米ランキングは『Forbes AMERICA'S TOP COLLEGES2016』より

改革のための工夫 ③

先生がチャレンジしやすい 学校文化を育む

①30秒ルールと挑戦の推奨

先生たちに日野田先生は、「何時間も考えて正解を出そうとせず、30秒で決めてやってみてからフィードバックを受けましょう」と推奨。生徒の命に関わらない限りは「何でもチャレンジしていい、失敗してもいい」と言い続けた。

②先生の仕事の負担軽減

挑戦を求めただけだと、先生たちの仕事は雪だるま式に増えかねない。補講や補習の原則取りやめ、採点業務軽減のためのマークシートの機械の導入、一部定期テストの模試への転換の検討、超過勤務を減らす呼びかけなど、仕事の負担軽減にも注力している。

③否定ではなくリスクヘッジへ

管理職や分掌長、学年主任からなる運営委員会では、各分掌や各学年が責任をもってまとめた提案を否定することはNGに。何らかのリスクを感じるなら「どんな対策や回避策をとればいいのか」というリスクヘッジの意見を出してその提案を皆でサポートすることを目指した。

④校長が責任を取ると明言

失敗やトラブルの最終責任は「校長が取る」とも明言。実際、教育委員会をはじめ関係者への事情説明は日野田先生が積極的に引き受けた。

生徒がチャレンジ精神をもち、オープンマインドで物事に取り組めるよう、学校環境も整えられていった。
2015年度からは、定期テストへの代替も見すえて、民間のスコア型英語4技能検定を学校に導入した。
「合格・不合格ではないスコア型検定なら、どんな生徒も次の目標設定ができます。高得点の生徒だけでなく、200点を300点に伸ばした生徒の努力も評価できる学習環境にしたかった」

テストや設備環境も工夫し、 生徒の意欲や勇気を引き出す

また、2016年度には普通科と共にあった国際教養科の募集を停止、理系の進路選択が可能なる「グローバル科(国際科)」の募集を始める。同校の「国際」は語学を学ぶ文系ではなく、英語を使って学問を学ぶコースであることを打ち出したのだ。

2016年度には図書館を改修、生徒たちが有機的に結び付きながら議論できる空間を館内に生み出した。こうした改革が進むにつれ、生徒にも変化が見られるようになった。例えば500語の英文エッセイを課題で出すと、テストでは最下位を争うほど苦戦している生徒も、字数稼ぎはせず、文法の間違いはあれど、自分の伝えたいことを500語以上で綴ったという。
「英語で『意思を伝えられる』と自分を信じていることができたのかな、と思えて嬉しかったです」(高木先生)
土曜特設講座の生徒の変貌に、日野田先生が胸打たれたこともあった。「考えた課題解決案を発表する際に、あるチームが『完成しなかった』というプレゼンをしたんです。実際には8割方はできていたんですよ。でも『みんな

のです」(寺下先生)
民間企業と連携し、短期夏季留学も再構築。世界の第一線で社会課題の解決に挑む人々と英語でふれあって学ぶプログラムに進化させた。
設備の充実も進んでいる。2014年度に壁一面ホワイトボードの教室を11室整備、大型ホワイトボードも数十台購入して授業で使えるようにした。「大きなホワイトボードに皆で書き込むと、どの書き込みが誰のかわからなくなり、それぞれの意見を人に引く張られることなくフラットに受け止められます。オープンマインドに議論しやすくなるんです」(日野田先生)
2016年度には図書館を改修、生徒たちが有機的に結び付きながら議論できる空間を館内に生み出した。こうした改革が進むにつれ、生徒にも変化が見られるようになった。例えば500語の英文エッセイを課題で出すと、テストでは最下位を争うほど苦戦している生徒も、字数稼ぎはせず、文法の間違いはあれど、自分の伝えたいことを500語以上で綴ったという。
「英語で『意思を伝えられる』と自分を信じていることができたのかな、と思えて嬉しかったです」(高木先生)
土曜特設講座の生徒の変貌に、日野田先生が胸打たれたこともあった。「考えた課題解決案を発表する際に、あるチームが『完成しなかった』というプレゼンをしたんです。実際には8割方はできていたんですよ。でも『みんな



スタンフォード大学のd-schoolの設計思想を参考にして改修した図書館。椅子をもって移動したり、何人かで車座になって円卓を囲んだり、やりたことに合わせて臨機応変に自分たちでその場の在り方を変えていく。

※2 TOEFL iBT (TOEFL Internet-based Test) …インターネット形式で実施される英語4技能テスト。英語を「知っているか」ではなく「使えるか」に焦点を当てている。